

# SHOW-HHEYシネマルーム

★★★★

## 709の人たち—不屈の中国人権派 弁護士とその家族たち— (709 人們)

2017年/中国映画

主催：認定NPO法人ヒューマンライツ・ナウ関西グループ・92分

2017 (平成29) 年12月7日鑑賞

大阪市立総合生涯学習センター第一研修室

Data

監督：盧敬華 (ロー・キンファ)

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

### 👁️👁️ みどころ

日本弁護士連合会の中で、人権派弁護士の存在感は一種の「華」として際立っているが、さて中国では？戦前の日本共産党の弾圧は1928年の「3. 15事件」等で有名だが、あなたは2015年7月9日に中国で起きた人権派弁護士への大弾圧を知ってる？

そんな事件に関心を持った香港の盧敬華監督がカメラを持って中国本土に入り、逮捕された人権派弁護士の家族や妻からのインタビューを中心にドキュメンタリー映画たる本作を完成させた。もちろん、中国での上映は不可能な本作を、大阪の上映会で鑑賞。さあその出来は？衝撃度は？

中国映画『戦狼2 ウルフ・オブウォー2』（17年）とは正反対の本作の面白さをじっくり味わいつつ、その問題提起をしっかりと考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■上映会の案内をフェイスブックから！■□■

私は去る11月19日に、一人の中国人の友人から、『709の人たち』の上映について、下記のフェイスブックの情報を受け取った。そして、この映画については新聞記事で読み、関心を持っていたので、直ちに参加することを確約した。

記

世界人権デーイベント いま中国の人権問題を考える

映画『709の人たち—不屈の中国人権派弁護士とその家族たち』上映会とトークイベントのお知らせ

2015年7月9日、この日を境に中国では300人ともいわれる規模で一斉に弁護士や活動家に対する取り締まりが行われました。約30人が拘束され、そのうち、逮捕、起訴され、有罪判決を受けた人もいます。依然、拘束を解かれておらず、どこで、どのように過ごしているのかさえ、わからない人もいます。

事件の背景には、中国の民主化を警戒し、現体制の崩壊を恐れる習近平政権が、法律のエキスパートである弁護士たちに制裁を加えたとの指摘があります。

中国人権派弁護士たちは、社会的弱者の権利擁護のために奔走してきました。夫や友人、知人の早期釈放を求める家族や支援者は、国際社会の関心と支援が力になると言います。日本では弁護士について、あまり報じられてはきませんでした。拘置所や監獄で弁護士らがどのような扱いを受けているのか、ほとんど情報がなく、懸念する声が上がっています。国際社会が関心を示すことで、彼らが適切な扱いを受けられるようになるかもしれません。

夫の帰りを待つ妻や子どもたちの心の叫びを、隣国の日本からも聞いてみるべきではないか。そのような問題意識から、このたび、本イベントを企画いたしました。映画からは、弁護士とその家族、支援者が必死に生きる姿が伝わってきます。彼らの訴えを通して、人として、何を大切にすべきであるのか、何を追求すべきであるのかを共に考えたいと思います。

なお、映画上映後には、映画監督の池谷薫氏、神戸大学の梶谷懐氏、東京大学の阿古智子氏によるトークセッションを行います。

## 記

日時：2017年12月7日（木）18:00 開場、18:30 上映開始（21:00 終了予定）

場所：大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室

大阪市北区梅田 1-2-2・500 大阪駅前第2ビル5階 (<http://osakademanabu.com/umeda/access>)

参加費：500円 申し込み不要

主催：認定NPO法人ヒューマンライツ・ナウ 関西グループ

共催：神戸大学現代中国研究拠点

協力：ヒューライツ大阪（一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター）、公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本

<アフタートーク 登壇者プロフィール>

池谷薫：1958年、東京生まれ。同志社大学卒業後、数多くのテレビドキュメンタリーを演出する。劇場デビュー作となった『延安の娘』（02年）は文化大革命に翻弄された父娘の再会を描き、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭最優秀ドキュメンタリー映画賞ほか多数受賞。2作目の『蟻の兵隊』（06年）は「日本軍山西省残留問題」の真相に迫り記録的なロングランヒットとなる。3作目の『先祖になる』は東日本大震災で息子をなくした木こりの老人が自宅を再建するまでを追い、ベルリン国際映画祭エキュメニカル賞特別賞、香港国際映画祭グランプリ、文化庁映画賞大賞を受賞。4作目の『ルンタ』（15年）は非暴力の闘いに込められたチベット人の心を描く。2008年から13年まで立教大学現代心理学部映像身体学科の特任教授を務め、卒業制作としてプロデュースした『ちづる』は全国規模の劇場公開を果たす。著書に『蟻の兵隊 日本兵2600人 山西省残留の真相』（07年・新潮社）、『人間を撮る ドキュメンタリーがうまれる瞬間（とき）』（08年・平凡社・日本エッセイスト・クラブ賞）がある。2017年9月より甲南女子大学文学部メディア表現学科教授。

梶谷懐：1970年大阪府生まれ。神戸大学大学院経済学研究科博士課程修了。神戸学院大学准教授などを

を経て、現在、神戸大学経済学部教授。専門は現代中国経済論。著書に『現代中国の財政金融システム——グローバル化と中央・地方関係の経済学』（11年・名古屋大学出版会）、『「壁と卵」の現代中国論——リスク社会化する超大国とどう向き合うのか』（11年・人文書院）、『日本と中国、「脱近代」の誘惑——アジア的なものを再考する』（15年・太田出版）、『日本と中国経済——相互交流と衝突の100年』（16年・ちくま新書）がある。

阿古智子：1971年大阪府生まれ。東京大学大学院総合文化研究科准教授。大阪外国語大学、名古屋大学大学院を経て、香港大学教育学系 Ph.D（博士）取得。在中国日本大使館専門調査員、早稲田大学准教授などを経て、2013年より現職。現代中国の政治・社会変動、農村の社会関係資本、農村から都市へ向かう出稼ぎ労働者、土地・戸籍制度、知識人や市民社会の動向などを研究している。著書に『貧者を喰らう国——中国格差社会からの警告』（14年・新潮選書）、『超大国・中国のゆくえ5 勃興する「民」』（共著、16年・東京大学出版会）がある。

## ■□■新聞記事でも確認！こりゃ必見！■□■

私が切り取り保管していた記事は、2017年11月1日付朝日新聞。その「ひと」の欄では「中国の人権弾圧を撮る香港人監督」として盧監督（60歳）を取り上げている。同記事によれば、『709の人たち』は彼の初監督作品。彼は2017年7月に来日して東京での本作の上映会に参加し、今回12月7日の大阪での自主上映会にも参加し、多くの日本人が中国の民主主義にも興味を持ってもらえるよう呼びかけたそうだ。

盧監督は大学で映画製作を学び、「社会や政治を追いたい」と考えて雑誌記者などを経験し、1989年の天安門事件（六四事件）の直前には北京で学生運動を取材したこともあるそうだ。そして、ケーブルテレビ局を退社した後の2016年夏に、香港の人権NGOから今回の作品について打診され、「もしも自分が逮捕されたら調べて欲しい」と知人に頼んで撮影に挑んだそうだ。もちろん、ビデオカメラによる本作の撮影は中国当局には内緒。観光客を装って約3週間中国各地を撮影のために回り、政府転覆を図ったとして拘束された弁護士とその家族ら約20人の姿を撮影した。娯楽作が多い香港で、中国の人権弾圧を正面から取り上げた映画はきわめて珍しい。この新聞記事を読めば、盧監督の人となり、彼が本作の撮影と製作にかけた情熱がひしひしと伝わってくる。

## ■□■さらに新聞記事でその内容を確認！■□■

本作の鑑賞に向けて、ネット上での資料を集めていた中、2017年12月5日付朝日新聞は「人権派弾圧 中国の今に迫る」「拘束・尾行・出国不許可・・・弁護士や家族ら訴え」「香港の監督撮影『709の人たち』7日上映会」と題する大きな記事を掲載し、本作を詳しく紹介した。そこでは、まず①「709」とは2015年7月9日、多くの人権派弁護士らが中国政府に検挙されたことにちなんで付けられたこと、②盧監督は観光客を装ってビデオカメラを手に中国を回り、当局の監視をかいくぐって拘束された当事者や家族

らへのインタビューを撮影し、それを中心に92分にまとめたことを紹介。続いて、同作では、①家族が出かけようとするだけで何者かに尾行される薄気味悪さや、当局から子どもの小学校入学の手续を妨害された理不尽さが語られていること、②同作は香港や米国、カナダ等でも上映されたことを紹介している。そして、本作の日本語訳については、中国の研究を通じて人権派弁護士と接触する機会も多く、映画には家族ぐるみで付き合う弁護士もたくさん登場している東京大学の阿古智子准教授（現代中国研究）が大きな役割を果たしたことが紹介されている。彼女は自分の研究の合間に本作の翻訳に取り組み、日本語の字幕は2017年4月に完成したらしい。また、同年7月にNPO法人ヒューマンライツ・ナウが東京で開いた本作の上映会には、約200人が訪れたらしい。

12月7日の上映会は一般の映画館での上映ではなく、参加費5000円での研修室での上映だが、これだけ大きく報道されればそれなりの参加者数になるのでは……。そう思いながら上映時間の少し前に会場に入ると、すでに会場は80%埋まっていた。そこで、今回の上映に携わっていた友人のM弁護士や、上映後のトークに登場する映画監督で、一度私の事務所でお話をしたことがある池谷薫監督とも改めて名刺交換を。さらに、12月5日付朝日新聞の記事を書いた山根久美子記者とも名刺交換を。

## ■■■本作の製作と日本での公開の意義■■■

盧監督が香港から北京等の中国大陸の各地にビデオカメラを持ち込んで、秘密裏に人権派弁護士や人権活動家の家族や妻達と接触して本作を製作したことの狙いや意義、そしてその危険性等については新聞記事を読めばわかる。また、本作に日本語の字幕をつけたり、日本での上映を実現するについては、東京大学の阿古智子准教授（現代中国研究）や、国境を越えて人権を守る国際人権NGOであるヒューマンライツ・ナウ等が大きな役割を果たしたことも、新聞記事を読めばわかる。

本作はドキュメンタリー映画だから、その大半は2015年7月9日を中心に逮捕された300人余りの人権派弁護士や人権活動家の家族や妻達へのインタビューで構成されているが、その中心になっているのは、12月5日付新聞の上の写真に写っている4人の弁護士の妻達だ。また、写真下の女性弁護士・王宇と長男の包卓軒、夫の人権活動家・包龍軍の3人も、本作のインタビューの中で大きな役割を果たしている。ちなみに、オーストラリアへの留学が決定していた包卓軒君は留学前に日本に立ち寄ろうとし、それを阿古准教授が世話していたものの、出国直前に中国当局からパスポートを取り上げられ、出国が許可されなかったそうだ。また、上の写真で4人の妻達が持っているのは、赤いバケツにちょっとしたアピール文を書いたもの。なぜ、彼女達はこんなスタイルで「夫を返せ！」の活動を始めたの…？

## ■■■本作の内容は？その出来は？■■■

私は池谷監督のドキュメンタリー作品である『延安の娘』(02年)、『シネマルーム5』373頁参照)、『蟻の兵隊』(05年)、『シネマルーム11』149頁参照)を高く評価しているが、盧氏の監督初作品となった本作の出来も素晴らしい。とりわけ、本作冒頭には逮捕された某弁護士の妻が登場してくるが、映画の問題性や深刻さとは別に、彼女の美しさにビックリ!もともと、話が進むにしたがって思わず涙ぐんでいる彼女を見ていると、ホントにそれまではまったく予想もしていなかった世界に否応なく引きずりこまれていたのだという実感がひしひしと伝わってくる。そう、逮捕された彼らは皆、自分から「人権派弁護士」になりたいと願って活動を始めた訳ではなく、ただ、目の前の依頼事件を弁護士として法律にしたがって処理しようとしていただけ。なのに、それが法律違反だと言われ、さらには国家政権転覆扇動罪の容疑で逮捕すると言われたのでは・・・。

本作は問題が発覚した後に製作の意図が固まり、香港から盧監督が派遣されることになったため、逮捕された人権派弁護士や人権活動家本人の生の声が撮られていないのは残念。しかし、それを前提としてこのタイトルの本作が作られた訳だから、それは仕方ない。したがって、本作が「国家権力による人権派弁護士や人権活動家に対する違法不当な弾圧」という問題の本質を描くについて、それなりの限界があるのは当然だから、それを前提として本作を鑑賞する必要がある。しかし、逮捕された本人のインタビューはなくても、その家族や妻達のインタビューだけで十分な問題提起と説得力があることを実感!

## ■□■香港は?台湾は?続編は?■□■

盧監督の地元である香港でも、2014年の「雨傘運動」の盛り上がりがかうだったかのように、今では自由・民主を求める市民運動は低下している。これはもちろん去る10月18日から24日まで開催された第19回共産党大会で「習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想」を確立させ、独裁体制を強めた習近平国家主席の圧力によるものだ。また2016年に国民党から民進党への政権交代を果たした蔡英文総統率いる台湾でも、中国(本土)の台湾への圧力は強まっている。

本作の上映終了後、約45分間にわたって盧監督、池谷監督、阿古准教授の3氏によるトークショーが実施されたが、そのラストでは盧監督が今年8月にアメリカで本作の続編を作っていることが報告された。本作の登場人物の一部は本作制作の後アメリカに渡って、どんな生活をし、どんな活動をしているの?1989年の天安門事件当時の学生リーダーだった王丹達も事件後直ちにアメリカに亡命したが、その活動はごく一部しか伝えられていない。もちろん、アメリカは自由と民主の国だから、中国国内にとどまるよりよほどマシ(安全)に決まっているが、さて、アメリカでの生活と活動が始まった彼や彼女達の活動のよりどころや、心の安寧は?ぜひ盧監督の続編にも期待したい。

2017(平成29)年12月12日記